

# プラトン『饗宴』 I78b–c の引用について

納富信留

## I テクストの異同

プラトン『饗宴』では6名の「エロース讃美」が報告されるが、その口火をきるパイドロスの演説は、詩人の権威の引用から始まる。その箇所（I78b2–c2）では写本上異読の問題はないが<sup>\*1</sup>、現代の諸校訂本はそれと異なるテキストを印刷している。本論文は、そのテキスト改変の経緯を辿り、写本通りの読みが正しいことを示す。

まず、BTW という主要写本が一致して伝えるテキストは、以下の通りである<sup>\*2</sup>。

【プラトン『饗宴』 I78b–c】（以下の言及は、この行数で行う）

- b2 γονῆς γὰρ Ἐρωτος οὐτ' εἰσὶν οὔτε λέγονται ὑπ' οὐδενὸς οὔτε ἰδιώτου οὔτε ποιητοῦ, ἀλλ' Ἡσιόδος πρῶτον μὲν Χάος φησὶ γενέσθαι—
- b5 αὐτὰρ ἔπειτα  
Γαί' εὐρύτερνος, πάντων ἔδος ἀσφαλὲς αἰεὶ,  
ἦδ' Ἔρος
- b8 φησὶ μετὰ τὸ Χάος δύο τούτῳ γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα.  
Παρμενίδης δὲ τὴν γένεσιν λέγει—  
πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.
- c1 Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλειως ὁμολογεῖ. οὕτω πολλαχόθεν ὁμολογεῖται ὃ Ἔρος ἐν τοῖς πρεσβύτατος εἶναι.

というのは、エロースを子供とする親は存在しませんし、それは、散文作家によっても詩人によっても語られていません。ヘシオドスは、こう言っています。最初にカオスが生まれ、

「更に次に、広い胸をもつ大地（ガイア）が、すべてのものの常に揺るぎなき

<sup>\*1</sup> 直前の I78a9–b1 “τὸ γὰρ ἐν τοῖς πρεσβύτατον εἶναι τὸν θεὸν τίμιον” には、数種の異読があるが、本論文では扱わない。

<sup>\*2</sup> B (= cod. Bodleianus, E. D. Clarke 39, 895 AD); T (= cod. Venetus Append. Class. 4, cod. 1, 12 世紀); W (= cod. Vindobonensis 54, suppl. phil. Gr. 7, 11 世紀)。

座として、そしてエロースが」と。

彼は、カオスの後でこの二人の神々、大地（ゲー）とエロースが生まれたと言っているのです。他方で、パルメニデスも、その生まれについて語っています。

「すべての神々の中で、まず最初にエロースを工夫して作った。」

アクシレオスもヘシオドスに同意しています。このように、多くの方面から、エロースが神々の中でもっとも年長であることが合意されているのです。

ところが、Burnet が校訂した OCT 版 (1901<sup>1</sup>, 1910<sup>2</sup>) を始めとする現代の諸校訂版では、ヘシオドスの引用に続く 178b8–c2 が、次のように印刷されている。

b8 Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλεως σύμφησιν μετὰ τὸ Χάος δύο  
τούτῳ γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Παρμενίδης δὲ τὴν  
γένεσιν λέγει—

πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.

c1 οὕτῳ πολλαχόθεν ὁμολογείται ὁ Ἔρως ἐν τοῖς πρεσβύ-  
τατος εἶναι.

アクシレオスもヘシオドスに賛成して、カオスの後でこの二人の神々、大地とエロースが生まれたと主張しています。他方で、パルメニデスも、その生まれについて語っています。

「すべての神々の中で、まず最初にエロースを工夫して作った。」

このように、多くの方面から、エロースが神々の中でもっとも年長であることが合意されているのです。

Burnet 版はその後の定本となり、Dover (1980)、Vicaire (1989)、Rowe (1998) 等がこれに従っている。しかし、この数行には 18 世紀末以来議論があり、現在では広く受け入れられている Burnet のテキストは、複雑な経緯の末に校訂された新しい提案であった。

20 世紀の主な校訂版の中で、写本の読みを基本的に維持しているのは、Léon Robin による Budé 版 (1929<sup>1</sup>, 1958<sup>6</sup>) であった。但し、b8 “φῆσι” の後に “δῆ” を補っている。しかし、Vicaire による Budé 新版 (1989) では、他の諸版と同様に Burnet 版のテキストに変更されている。その変更に応じて、フランス語訳では、Chambry (1958) が Robin と共に写本通りの読みを、Brisson (1998) が Burnet–Vicaire の流布したテキストの読みを、それぞれ採用している\*3。

日本語訳では、ギリシア語原典から最初に翻訳を行った久保勉が、Robin を主に用いて

\*3 Brisson (1998), p. 188 の註はこの問題に触れているが、理解が混乱しているように見える。

写本通りに訳していた\*4。また、山本光雄訳、岩波全集版の鈴木照雄訳は、Burnet 版を底本としているにもかかわらず、この箇所については註記して写本の通りの読み方を採用している\*5。それに対して、森進一訳、朴一功訳は、特に註記することなく Burnet 版に従っている\*6。

Burnet 版は、主要写本の読みと、以下の 3 点で異なっている。

- (i) BTW の写本では、“Ἡσιόδω δὲ καὶ Ἀκουσίλειωσ ὁμολογεῖ” がパルメニデスの引用後の c1 にあったが、その前の b8 に移されている。
- (ii) 写本にあった c1 の動詞 “ὁμολογεῖ” が、移動した b8 では “σύμφησιν” に変えられている。
- (iii) ヘシオドス引用直後 b8 の “φησί” が削除され、移動した “σύμφησιν” の構文に統合されている。

最も新しい Rowe の註釈書はこのテキスト問題に触れ、写本通りの読み方も不可能ではないとしながら、内容上まったく違いがないため、わざわざそれを擁護する必要はないと断っている\*7。しかしながら、私はここには重要な違いがあり、写本の読みを採らなければプラトンの真意が読み取れないことを論じていく。

## 2 テキスト改竄の経緯

写本の読みが大きく変更されるのは、Martin Schanz の校訂 (1882) からであるが、この箇所については、それ以前から議論が向けられてきた。

[第 I 段階 18 世紀末の疑義提示]

Friedrich August Wolf (1759-1824) は、1782 年に出版した『饗宴』の註釈書 *Platons Gastmahl, Ein Dialog* で、伝統的なテキスト (Stephanus 版) を印刷しながら、註でこの箇所の読み疑問を提示している。Wolf は、Christian Gottlob Heyne (1729-1812) が前年に発表した意見として、パルメニデスへの言及部が後世の欄外註記 (gloss) の挿入であると

\*4 久保・阿部 (1934)、久保 (1952) 参照。

\*5 山本 (1952)、(1973)、鈴木 (1974) 参照。Robin の影響が強いとはいえ、日本語訳者たちの判断は注目に値する。なお、鈴木 (1966) の中央公論社版は、Burnet のテキストの通りに訳出していた。

\*6 森 (1963)、朴 (2007) 参照。

\*7 Cf. Rowe (1998), p. 137.

の見方を紹介している\*8。Heyne は、ストバイオスの抜粋を典拠にして、パルメニデスの引用がアリストテレス『形而上学』に由来する挿入であろうと示唆していたという（これら 2 典拠についてはすぐに検討する）。Wolf 自身は、後のアガトンの言及（195b-c）を参照し、この提案を受け入れてはいない。だが、この註は、以後の議論の出発点になった。

〔第 2 段階 19 世紀の後半まで〕

Heyne-Wolf の疑問が提示される以前、Stephanus（1578）の普及版は基本的に写本伝承に従っており\*9、それが諸校訂版に受け継がれていた。19 世紀に新たに校合を行った Bekker（1817）も、写本通りの読みを採っている。

他方で、Stallbaum（1836）は写本通りの読みを印刷しながら、Heyne らによる b8-10 “*φησὶ μετὰ ... πάντων.*” への疑義を註で論じている。パルメニデスの詩句に連動して、ヘシオドスへの言及も疑問視されるようになっている。

ヘシオドスの詩行を引用した直後 b8 にパイドロスが与えるパラフレイズは、詩句の内容のくり返しに過ぎないものと見なされ、その必要性に大きな疑義が投げかけられる。Ast（1821）と Zürich 版の Baiter et al.（1841）は、実際にヘシオドス引用後のパラフレイズとパルメニデスへの引用部、即ち、b8-10 “*φησὶ μετὰ ... πάντων.*” の全体に [ ] を付けて削除を提案している。さらに、Hommel（1834）の議論を受けて、19 世紀後半には、Jahn（1864）と Hug（1884）が b8 のパラフレイズ部を削除している\*10。Hermann（1851）は、逆に、ヘシオドスの引用自体（b6-7）の削除を提案している\*11。

〔疑義への典拠〕

b8-c2 の部分は、2 つの典拠との関係から正当性が疑われていた。一つは、ストバイオスによる抜粋であり、もう一つは、アリストテレスの並行（パラレル）記述である。この 2 典拠を検討しよう。

\*8 Wolf（1782），p. 20 参照。Wolf が言及するのは、Heyne（1781），p. 377 であるが、筆者は未見。19 世紀ドイツ古典文献学の理論的礎を築いた Wolf であったが、『饗宴』について写本校訂（recensio）は行っていない。Timpanaro（2005），p. 74, n. 47 参照。

\*9 但し、次の 2 箇所異なる語句が印刷されている：b2 *γονεῖς*, b3-4 *γενέσθαι φησὶν*。これらの起源がどこにあるのか、調査はついていない。

\*10 Hommel（1834），pp. 55-56 は註で問題を議論しているが、本文では写本通りに印刷している。Jahn（1864），p. 11, Hug（1884），p. 37 は削除記号を付ける。

\*11 Hermann（1851），Praefatio，p. xiii，p. 146 参照。不思議なことに、彼は“*ἀντὰρ ἔπειτα*”の部分は残している。Badham（1866）はテキストでは写本通りに印刷しているが、Praefatio，p. iv でやはりヘシオドス引用の削除を論じている。

【ストバイオス『精華集』*Anthologium* 1.9.12】(陰影部はプラトンとの相違箇所)

(12.) Τοῦ αὐτοῦ

Ἐφη Φαῖδρον ἀρξάμενον ἐνθένδε ποθὲν λέγειν, ὅτι μέγας θεὸς εἶη ὁ Ἔρως καὶ θαυμαστὸς ἐν ἀνθρώποις τε καὶ θεοῖς, πολλαχῆ μὲν καὶ ἄλλη, οὐχ ἥκιστα δὲ κατὰ τὴν γένεσιν. τὸ γὰρ ἐν τοῖς πρεσβύτατον εἶναι τῶν θεῶν τίμιον, ἣ δ' ὅς· τεκμήριον δὲ τούτου· γοῦναι γὰρ Ἔρωτος οὐτ' εἰσιν οὔτε λέγονται ὑπ' οὐδενὸς οὔτε ιδιώτου οὔτε ποιητοῦ, ἀλλὰ Ἡσίοδος πρῶτον μὲν Χάος φησὶ γίνεσθαι, μετὰ τὸ χάος δύο τούτω γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Ἡσιόδω δὲ καὶ Ἀκουσίλειως ξύμφησιν ἐν τοῖς πρεσβυτάτοις εἶναι· πρεσβυτάτος τε ὦν μεγίστων ἀγαθῶν ἡμῖν αἰτίας ἐστίν.

ストバイオスはこの項で『饗宴』178a-cから抜粋しているが、そこではパルメニデスへの言及と引用が完全に欠落している。また、ヘシオドスについても、パラフレイズだけで詩行の引用はない。最後に、アクシレオスの説明が若干表現を変えてある。

Heyneはこの抜粋を根拠に、パルメニデスの詩句が後世の欄外註記であると考え、その註記の元はアリストテレス『形而上学』の並行箇所にあったと推測した。

【アリストテレス『形而上学』A4, 984b23-31】(陰影部はプラトンとの一致箇所)

ὑποπεύσειε δ' ἂν τις Ἡσίοδον πρῶτον ζητῆσαι τὸ τοιοῦτον, κὰν εἴ τις ἄλλος ἔρωτα ἢ ἐπιθυμίαν ἐν τοῖς οὐσιν ἔθηκεν ὡς ἀρχήν, οἷον καὶ Παρμενίδης· καὶ γὰρ οὗτος κατασκευάζων τὴν τοῦ παντὸς γένεσιν πρῶτον<sup>\*12</sup> μὲν φησιν “ἔρωτα θεῶν μητίσαστο πάντων”, Ἡσίοδος δὲ “πάντων μὲν πρῶτιστα χάος γένητ', αὐτὰρ ἔπειτα / γαί' εὐρύστερνος. / ἦδ' ἔρος, ὃς πάντεσσι μεταπρέπει ἀθανάτοισιν”, ὡς δέον ἐν τοῖς οὐσιν ὑπάρχειν τιν' αἰτίαν ἣτις κινήσει καὶ συνάξει τὰ πράγματα.

ヘシオドスが最初にこのような原理を探求したのではないかと疑う人がいるかもしれない。あるいは、もしその他の誰かが、エロスや欲望を存在するもののうちに原理として立てたのであれば、その人であると。パルメニデスもそうであるように。というのは、彼もまた、すべてのものの生成を考案して、「すべての神々のうち」最初に「エロスを工夫して作った」と言っているからである。他方で、ヘシオドスは、「すべてのもののうち、最も初めにカオスが生まれ、更に次に広い胸をもつ大地（ガイア）が、そしてすべての不死なる神々のなかで秀でたエロスが」と言っている。これらは、存在するもののうちにそれらの事物を動かし結び付ける何かの原因があるに違いないと考えてのことである。

<sup>\*12</sup> 写本では“πρῶτον”とあるが、David Ross や Werner Jaeger の校訂版ではプラトンに対応させて“πρῶτιστον”に修正している。確かに写本の読みではヘキサメトロスを構成しないが、“πρῶτον”の語は地の文に組み込まれていたであろう。写本通りとする。

アリストテレスはパルメニデスの引用（断片 13）と並んで『神統記』の 116–117, 120 行を引用しており、『饗宴』に精確に対応する。その密接な対応は逆に、Heyne らによる『饗宴』のテキストへの疑義を生むことになった。だが、Wolf が指摘したように、アガトンも後にパルメニデスのこの詩句に言及している。

しかし、ストバイオスの『精華集』第 1 巻 9 章は「天上のアフロディテとエロース」という主題で名言を集めたもので、その第 5 項ではヘシオドス『神統記』の当該箇所が（116–117, 120 行のみ）、第 6 項ではパルメニデスの断片 13 が、それぞれ独立に収録されている。それに続く第 12 項での『饗宴』178a–c からの抜粋は、それらの抜粋に重ならないように修正されている。そこでヘシオドスの詩行が省略され、パルメニデスが言及されないのは、ストバイオスの文脈では当然なのである。

いずれにせよ、『饗宴』のテキストは、ストバイオスとアリストテレスとの関係で疑問に付され、改訂されていった。

### 〔第 3 段階 Schanz の改定案〕

引用をめぐる問題点を回避するために、アクシレオスの言及 (c1) を前に移す Schanz 提案が登場する<sup>\*13</sup>。Schanz は b8–c2 のテキストをこう復元した。

*Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλεως ὁμολογεῖ \*ὄς\* φησὶ μετὰ τὸ Χάος δύο τούτῳ γενέσθαι, Γῆν τε καὶ Ἔρωτα. Παρμενίδης δὲ τὴν Γένεσιν λέγει  
πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.  
οὕτω πολλαχόθεν ὁμολογεῖται ὃ Ἔρωτος ἐν τοῖς πρᾶξι βύτατος εἶναι.*

このように c1 にあった “Ἡσιόδῳ δὲ καὶ Ἀκουσίλεως ὁμολογεῖ” を b8 に移動させると、不必要とされてきた b8 “φησὶ … Ἔρωτα” の文の主語が、ヘシオドスではなくアクシレオスになり、パラフレイズの冗長性は回避される。Schanz はその間に関係代名詞 “ὄς” を挟んで 2 文を接続する提案をしている。

c1 を 3 行前に移動させることは、やや突飛に見えるかもしれない。しかし、19 世紀の論争では、b8–10 の 3 行全体に疑義がもたれ、一部の校訂者はその削除を提案していたことを思い出そう。もしその 3 行を省くと、c1 は b7 の直後に来る。様々な改訂案の中で、おそらくそのような発想が生まれたのであろう。

### 〔第 4 段階 Burnet 版の成立〕

Burnet は基本的に Schanz の改訂の方向を受け入れた上で、更に、ストバイオスから

<sup>\*13</sup> Cf. Schanz (1882), p. 7.

“σύμφησι”の語を取り入れた。

Burnet が “ὁμολογεῖ” を “σύμφησι” に変えたのは、Schanz による “ὄς” 挿入の提案に見られるように、移動後に 2 文の接続が問題となるからであろう。この点では、“σύμφημι” という動詞は、ストバイオスにもあるように、対格と不定詞を取ることが自然である。また、b8 の “φησι” という写本の読みが、“σύμφησι” からの破損と見なすことはそれほど難しくはない。

だが、“σύμφημι” が同意の相手として与格を伴った上で、対格と不定詞を目的句に持つ用例は、LSJ の範囲では見られない。プラトンでは若干の用例があるが、この一語で「～に同意する」と、「……が……であると主張する」という二義を込めるには、やや無理があるかもしれない<sup>\*14</sup>。

この改訂の後、Heyne らが提起したパルメニデス引用部への疑義は、大きな障碍とは見なされなくなる。パルメニデスの引用自体は、c1-2 “οὕτω πολλαχόθεν ὁμολογεῖται” という表現が 2 名以上の証言に相応しい点、及び、195b-c のアガトンの言及によって、擁護されるからである<sup>\*15</sup>。

このような複合的な推測と改変の上で、現行の校訂版テキストが成立した。Burnet 版は、それ自体として自然な読みを提供するテキストとして、以後急速に普及していく。

#### 〔第 5 段階 20 世紀の動向〕

Schanz の改訂案を受けながら、20 世紀前半には Burnet とは違う改訂を行う者もいた。

まず、Loeb 古典叢書の Lamb (1925) は、関係代名詞を追加せずに c1 の b8 への移動だけを採用する<sup>\*16</sup>。そこで、“φησι” の主語はアクシレオスと解されている。

Bury (1909<sup>1</sup>, 1932<sup>2</sup>) も Schanz の移動案を受けられるが、b8 “φησι… Ἐρωτα.” の部分を “ὁμολογεῖ” の欄外註記として削除する<sup>\*17</sup>。つまり、その文の主語がアクシレオスに変わっても、なお冗長性があるとの疑義が残っていたのである。

これらの校訂は、Schanz の移動提案が大きな影響力を揮ったこと、他方で、Burnet の異なる改訂案は必ずしもすぐに受け入れられていなかったことを示す。

既に紹介したように、Burnet 以降で写本の読みを維持していたのは Robin の Budé 版だけであった。だが、1989 年に改訂された Budé 新版では、Burnet 校訂と同じに変えられて

<sup>\*14</sup> プラトン著作集の範囲では、『ラケス』 199a と、偽作と見なされる『ヒッパルコス』 232b で、この構文が見られる。

<sup>\*15</sup> Cf. Bury (1909<sup>1</sup>, 1932<sup>2</sup>), p. 23.

<sup>\*16</sup> Lamb (1925), p. 100.

<sup>\*17</sup> Bury (1909<sup>1</sup>, 1932<sup>2</sup>), pp. 22-23.

しまった。そのため、現在流布するほとんどの主要なギリシア語校訂版とそれに依拠する翻訳が、Burnet 版テキストの読みとなっている。

### 3 ヒピアス『名言集』からの引用

このテキスト改訂問題を大きく左右する新しい知見がある。それは、ここでパイドロスが語るヘシオドスとパルメニデスの引用に関わる。2つの引用を精査しよう。

[ヘシオドスの引用]

ヘシオドスが、カオスからエロースが生まれるまでを謳ったのが『神統記』116–122 行である。

[ヘシオドス『神統記』116–122] (陰影部はプラトンの引用箇所)

- 116 ἦτοι μὲν πρώτιστα Χάος γένητ'· αὐτὰρ ἔπειτα  
 Γαί' εὐρύστερνος, πάντων ἕδος ἀσφαλὲς αἰεὶ  
 ἀθανάτων οἳ ἔχουσι κάρη νιφόντος Ὀλύμπου,  
 Τάρταρά τ' ἠερόεντα μυχῶ χθονὸς εὐρυδοείης,  
 120 ἠδ' Ἔρος, ὃς κάλλιστος ἐν ἀθανάτοισι θεοῖσι,  
 λυσιμελής, πάντων τε θεῶν πάντων τ' ἀνθρώπων  
 δάμναται ἐν στήθεσσι νόον καὶ ἐπίφρονα βουλήν.

このうちパイドロスが一まとまりで引用しているのは、116 行後半から 117 行、そして 120 行目の初めの部分である。間の 2 行が飛ばされていることが、大きな問題となる。内容的には、118 行の“ἀθανάτων” (不死=神々) の語が落ちることで、117 行 (178b6) の“πάντων”が「すべての者/物」といった不確定の対象を指すことになってしまう。但し、パイドロスの引用の文脈では、その 2 行がなくても意味は十分に取れる。

Hug は、プラトンとアリストテレスがその 2 行を知らなかったとコメントしている<sup>\*18</sup>。つまり、彼らが『神統記』を、現在に伝承されるテキストとは異なるテキストで読んでいたと、ここから推測したのである。この点は、実際、ヘシオドスのテキスト校訂にも問題を投げかけてきた。その帰趨は後述する。

[パルメニデスの引用]

パルメニデスの詩からの短い引用は、この箇所を主要典拠としてディールス・クランツ

<sup>\*18</sup> Cf. Hug (1884), p. 36.

の断片集 (DK) に B13 として収録されている。彼の詩の第 2 部「思いこみの道」に属することは間違いがないが、文脈は不明である。この断片には、プラトン当該箇所とアリストテレス『形而上学』A4 を最古の証言として、他に後世の 2 箇所が典拠とされる。

【プルタルコス『愛について』*Amatorius*, 13, 756 F】

διὸ Παρμενίδης μὲν ἀποφαίνει τὸν Ἔρωτα τῶν Ἀφροδίτης ἔργων πρεσβύτατον ἐν τῇ  
κοσμογονίᾳ γράφων  
πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο πάντων.

プルタルコスは直後にヘシオドス『神統記』120 行に言及しており、プラトン『饗宴』との対応も想定される。

【シンプリキオス『アリストテレス『自然学』註解』39, 18-20<sup>\*19</sup>】

ταύτην καὶ θεῶν αἰτίαν εἶναι φησι λέγων  
πρώτιστον μὲν Ἔρωτα θεῶν μητίσατο<sup>\*20</sup> πάντων.  
καὶ τὰ ἐξῆς.

シンプリキオスは『形而上学』第 1 巻 4 章も意識していたかもしれないが、アリストテレスとは違って、“πρώτιστον”の語も正確に引用している。

これらのパルメニデス典拠からは、その詩句では何が主語かの論争も生じている。パイドロスは b9 “τὴν γένεσιν” (生成) を主語にとっているという読みもあるが (その場合、語頭が大文字で印字される)、私はパルメニデスが「生成」を神格化して語った可能性は低いと考える。また、プラトンでの引用部をそう読む必要はまったくない。他方で、プルタルコスは“Ἀφροδίτη”，シンプリキオスは“δαίμων”を主語においている。オリジナルの文脈がない以上、復元は困難である。後にアガトンが言及する際には (後に引用する) “ἀνάγκη” を主語に取っている、という解釈もある。

こういった論争に相即して、Rettig (1875) は導入部 b9 の“τὴν γένεσιν”を、Jahn (1865) は“τὴν γένεσιν λέγει”を削除している。

[アリストテレスとの並行性]

ヘシオドス『神統記』118-119 行は、プラトンとアリストテレス、及び、その影響を受

<sup>\*19</sup> *Simplicii in Aristotelis Physicorum libros quattuor priores commentaria*, edidit Hermann Diels, 1882.

<sup>\*20</sup> *μητίσατο*, DE.

けた引用でだけ欠落しており<sup>\*21</sup>、ヘシオドスの写本ではまったく疑われていない。West はヘシオドスの註釈書でこの欠落について検討し、その 2 行がすべてのヘシオドス写本に見られること、テオフィロス、ヒッポリュトス、ストバイオスら古代の著述家にも知られていたこと、そして一連の詩句の内容上の妥当性から、真正性は疑う余地がないものと結論づけている<sup>\*22</sup>。

すると、プラトンとアリストテレスは、この文脈では内容的に不必要という理由から、2 行を省いて引用しているのであろう。だが、2 人の引用の仕方の共通性は偶然であるとは思われない。執筆時期としては間違いなく『饗宴』（前 370 年代？）が『形而上学』講義に先立つことから、アリストテレスがプラトンのテキストを引用したと考えたくなる。しかし、両者の引用範囲は若干異なっており、アリストテレスが 116 行と 120 行をプラトンより長く引用している（その代わり、117 行は前半部のみ）。この点では、プラトンから単純に孫引きしたのではなく、別の典拠を用いたと想定すべきである。だがその場合、もし手元にヘシオドスの元本があったのであれば、何故欠落の 2 行を埋めなかったのか、という疑問が残る。

反対に、プラトンのテキストに当初はなかったパルメニデスの引用が、アリストテレスに由来する欄外註記から紛れ込んだという Heyne の示唆も、アガトンによる言及を考慮するとほぼ不可能である。それゆえ、プラトンとアリストテレスは直接の引用関係にあるのではなく、両者に共通する源泉・出典があると考えるのが自然であろう。この並行性は以前から知られていたが、『饗宴』においては、パルメニデス引用をめぐる疑念と混乱を惹き起こしてきた。

#### 〔典拠としてのヒッピアス〕

しかし、この問題を一挙に解決する提案が、別の研究から登場する。プラトンもアリストテレスも、ソフィスト・ヒッピアスの『名言集』*Anthologia* から引用していたという推定である。これは、哲学説の伝承 (doxography) を研究した Bruno Snell の知見を、Classen がこのテキストに適用したものである。

Snell は初め、アリストテレス『形而上学』第 1 巻 3 章 983b21 以降のタレスの説明が、プラトン『クラテュロス』402b に対応することに気づき、それがヒッピアスの『名言集』編集の方針に合うことを説得的に論じて、受け入れられてきた<sup>\*23</sup>。

前 5 世紀後半までに「抜粋集」を編集したとされる人物は、私たちの知るかぎりでは

<sup>\*21</sup> ストバイオス『精華集』I.9.5 参照。その抜粋は、『饗宴』178b からのものであろう。

<sup>\*22</sup> West (1966), pp. 193–194.

<sup>\*23</sup> Cf. Snell (1944), p. 170 ff. (*Crat.* 402a–c), von Kienle (1961), p. 41 ff.

ヒッピアスだけであり、もしプラトンとアリストテレスが何らか共通の出典をもつとすると、状況からほぼヒッピアスに間違いはない。

ヒッピアスの編集方針については、次の証言がある。

【アレクサンドリアのクレメンス『雑録』*Stromateis* VI.15 = DK 86B6】

τούτων ἴσως εἶρηται τὰ μὲν Ὀρφεῖ, τὰ δὲ Μουσαίωι κατὰ βραχὺ ἄλλωι ἀλλαχοῦ, τὰ δὲ Ἡσιόδωι τὰ δὲ Ὀμήρωι, τὰ δὲ τοῖς ἄλλοις τῶν ποιητῶν, τὰ δὲ ἐν συγγραφαῖς τὰ μὲν Ἑλλησι τὰ δὲ βαρβάροις· ἐγὼ δὲ ἐκ πάντων τούτων τὰ μέγιστα καὶ ὁμόφυλα συνθεῖς τοῦτον καινὸν καὶ πολυειδῆ τὸν λόγον ποιήσομαι.

こうした事柄のなかで、あることはオルフェウスによって語られ、あることはムサイオスによって簡潔にそれぞれの場所でそれぞれの仕方でも語られており、またあることはヘシオドス、あることはホメロス、あるいは他の詩人たちによって語られている。またあることは、ギリシア人の、あることは異国人たちの散文著作において語られている。私は、これらすべてから、最も重要で同一なものを結合させて、この新しい多彩な言論作品をつくるのだ。

これは「断片」とされているが、おおよその引用であり、逐語的なものではなからう。ヒッピアスには『選集』*Συναγωγή*という著作があり（散逸）、そこではタルゲリアという女性の結婚歴が論じられているが、それとの関係は不明である（DK 86B4）。

「詩人」（韻文）と「散文著作」の両方から重要な部分を抜粋するという方針は、パイドロスの引用紹介の仕方（178b1-3）と非常に類似している。ClassenはSnellの研究を発展させ、『クラテュロス』と同様に『饗宴』での引用がアリストテレスと共通する典拠、即ちヒッピアスにあることを推定した。それを受けて、Patznerは、この箇所も含めてヒッピアス『名言集』から引用と推定される箇所を網羅的、かつ分類的に検討している。

Classen以来、MansfeldやPatznerらの学説誌研究により、『饗宴』178b-cがヒッピアスに由来することは、ほぼ確実視されている<sup>\*24</sup>。しかし、彼らの関心は、並行箇所を探索して『名言集』を復元することにあり、引用がはめ込まれたプラトンの文脈自体は顧みられていない。他方で、その後に書かれたDover, Roweらの『饗宴』註釈書で、この知見はまったく顧慮されていない。

〔アクシレオスの学説〕

『饗宴』の当該箇所が、「エロース」に関わる詩人や学識者の言葉を集めたヒッピアス

<sup>\*24</sup> Cf. Classen (1965), pp. 175-178. Mansfeld ([1986]/1990), pp. 35, 46, 48, 71, n. 9, Patzner (1986), pp. 43-48.

『名言集』からの引用であるとする、ヘシオドスとパルメニデスと並んでアクシレオスが登場することは自然に納得される。

Patzer は、基本的に写本通りの読みを採った上で、ヒッピアスの編集方針が年代順であり、「ヘシオドス、パルメニデス、アクシレオス」と並んでいた可能性を示唆する<sup>\*25</sup>。

アルゴス出身のアクシラオス（プラトンは「アクシレオス」と表記するが同一人物）は、ヘシオドス（前 700 年頃）の散文化を行ったともされる人物であり、『系譜論』Γενεαλογίαを著わした<sup>\*26</sup>。彼の年代ははっきりとは分からないが、活躍したのは前 5 世紀前半、ペルシア戦争の時期と推定されており、その場合パルメニデス（前 5 世紀初）よりやや後になる。年代順という Patzer の提案は妥当であろう。

Schanz-Burnet のようにアクシレオスへの言及を前に移して合成すると、文脈から彼もカオスの後に「大地とエロースが生まれた」と語っていたことになる。だが、伝承された学説はそれとは適合しない。

【ダマスキオス『第一の諸原理について』 124 (I.320, 10R.) = DK 9B1】

*Ἀκουσίλαος δὲ Χάος μὲν ὑποτίθεσθαι μοι δοκεῖ τὴν πρώτην ἀρχὴν ὡς πάντῃ ἀγνωστον, τὰς δὲ δύο μετὰ τὴν μίαν Ἐρεβος μὲν τὴν ἄρρενα, τὴν δὲ θήλειαν Νύκτα ... ἐκ δὲ τούτων φησὶ μυχθέντων Αἰθέρα γενέσθαι καὶ Ἐρωτα καὶ Μῆτιν.*

アクシラオスは、第一原理が、誰にも知られないものとして、カオスであると措定したと私に思われる。この 1 つの原理の後に、2 つの原理、即ち、エレボスという男性的原理と、ニュクスという女性的原理がある。〔中略〕これらが交わって、そこからアイテールとエロースとメーティスが生まれた。

この証言の出典は、アリストテレスの弟子エウデモスであったと明言されている (fr. 117 Wehrli)。アクシラオスについては、フィロデモス『敬虔について』のパピルスでも、「第一のものであるカオスから、他のものどもが〔生じた〕」と語ったとされる<sup>\*27</sup>。「カオス」を最初とする点ではヘシオドスと共通するが、その後「エロース」の出生にいたる系譜は両者で異なっている<sup>\*28</sup>。

<sup>\*25</sup> Patzer (1986), p. 46.

<sup>\*26</sup> クレメンズ『雑録』 6.26 = DK 9A4。七賢人の一人に数えられることもあるが (DL 1.41 = DK 9A1)、時代は他の候補者よりかなり下る。断片とその分析は、丸橋 (1996) 参照。

<sup>\*27</sup> 『敬虔について』 137, 13 p. 61 Gomperz = DK 9B1。但し、1866 年刊 Theodor Gomperz 版での当該部は、Dirk Obbink の 1997 年版には収録されておらず、現在では再検討の余地があるようである。

<sup>\*28</sup> ヘシオドスとの相違については、丸橋 (1996)、106 頁参照。

【「テオクリトスへの古註」 13 1/2c Wendel = DK 9B3】

ἀμφιβάλλει, τίνος υἱὸν εἶπηι τὸν Ἔρωτα· Ἡσιόδος μὲν γὰρ Χάους καὶ Γῆς, Σιμωνίδης Ἄρεος καὶ Ἀφροδίτης, Ἀκουσίλαος Νυκτὸς καὶ Αἰθέρος.

〔テオンによれば〕 エロースがだれの子とすべきかは定かでない。ヘシオドスはカオスとゲーの子だと言い、シモニデスはアレスとアフロディテ、アクシラオスはニュクスとアイテールの子だと言うように。

ヘシオドス『神統記』への言及は、私たちが見てきた 116–120 行を指し、シモニデスの言及は断片 43 D とされる\*29。ダマスキオスやテオンの報告が正しければ、アクシレオスは決してヘシオドスと同一のことを語ったわけではなく、「同意している」のは、エロースがカオスの後に生まれた非常に古い神々の一人である、という点に限られる。エロースとカオスの関係は、ヘシオドスのように直結するものではなく、中間段階があると、アクシレオスは考えていたのである。

そうである以上、両者の主張を同一化する Schanz–Burnet の改訂は、かえって元の内容を損なうことになる。

〔ヒッピアス考慮の帰結〕

もしパイドロスがヒッピアスの『名言集』から適宜引用しながら語っているとすると、以下の点が推定される。

- (i) ここで紹介されるヘシオドス『神統記』、パルメニデスの断片 13、アクシレオスの説は、ヒッピアスが「愛（エロース）について」といった主題で集めた名言の一部であった。
- (ii) ヒッピアスはおそらく年代の古い順に名言を収録していたのであろう。それに依拠するパイドロスの引用も、写本の読み通り、ヘシオドス、パルメニデス、アクシレオスの順であったと推定される。
- (iii) ヘシオドスの詩句 118–119 行を 2 行省略して引用したのは、おそらくヒッピアスであり、プラトンとアリストテレスはその資料から引用したために、同じ 2 行を欠くと考えるのが自然である。そうであるとすると、Hug が主張したように、プラトンとアリストテレス自身がこの 2 行を知らなかったということは帰結しない。
- (iv) パイドロスは引用詩句について、「ガイア」という古語を「ゲー」と言い換えるなど、パラフレイズを加えている。現代の註釈者から見ると冗長にみえる部分ではあ

\*29 Cf. Th. Bergk, *Poetae lyrici graeci* III<sup>4</sup> 408.

るが、これが『名言集』から引用する作法であったと考えられる。

- (v) アクシレオスについて、ヒッピアスは独立の証言や引用を取っていたかもしれない。その場合、パイドロスはそれを簡単に「ヘシオドスに同意しています」とまとめたのであろうが、他の証言を参照する限り、両者の主張が完全に同じという意味ではなかったことが分かる。

#### 4 パイドロスの演説と「引用」について

パイドロスは、彼とソクラテスが二人で対話する『パイドロス』篇では、リュシアスの弁論模擬作品を暗唱しようとしている「言論好き」の若者として登場している<sup>\*30</sup>。彼はまた『プロタゴラス』篇では、カリアスの邸でヒッピアスに熱心に従っている若者の一人として描かれている (315c)<sup>\*31</sup>。パイドロスは、弁論家、詩人、ソフィストら知識人の書き物を誦んじてはそれを披露したり、引用して知識をひけらかしたりするのが好きな文学青年であったのであろう。

アガトン祝勝会の饗宴では、通常の飲酒や音楽を楽しむのではなく（二日酔いのせいもあるが）、言論を交わすことを主とするという合意がなされる。そこで選ばれて主題となる「エロース讃美」は、言い出したエリュクシマコスによれば、実はパイドロスの強い提案であった (177a-d)。他の神々と異なりエロースにだけは、詩人やソフィストたちによって讃辞が作られていないことに、彼は憤慨していたという。それがきっかけとなって、当のパイドロスが「この言論の父」(πατήρ τοῦ λόγου, 177d) として、最初の演説者に指名されたのである。

エリュクシマコスの提案によって「エロース」がテーマに選ばれた時、パイドロスはおそらく既にその話題について事前に勉強していて、いつでも話せる準備を整えていたに違いない。その種本として、ヒッピアス『名言集』が用いられたことは十分に推測される。指名されたパイドロスは開口一番、そこから3名の知者の「名言」を権威として引用して、自分のスピーチを始めたのである。

パイドロスのこの語りは、まず詩句や文章を引用をして、それに適宜パラフレイズを加えるスタイルであったことが見て取られる。現代では冗長に感じられるが、古代において、それは自然な「引用」の作法であったのであろう。古い言い回しを説明したり、他との類似性を指摘したりしながら自分の主張を裏付けていく手法に、ヒッピアスが抜粋を編

<sup>\*30</sup> パイドロスの「言論好き」(φιλόλογος) という性格については、Ferrari (1987) 参照。

<sup>\*31</sup> Cf. Classen (1965), p. 177.

集した『名言集』は有用であった\*32。そのような「知識」の披瀝は、本当の知者にとっては底の浅いものに見えたにしても、多くの教養人に好まれていたことが容易に想像できる。パイドロスの語りの聞き手たち、つまり宴会の参加者たちも、彼がヒッピアスに依拠していることを承知しながら、それに応答していく。一種の知的な遊戯がなされていたと考えられる。

アガトンは後に、自分の演説の中で、パイドロスの議論にコメントして、彼のヘシオドスとパルメニデス解釈が正しくないことを批判する。

#### 【プラトン『饗宴』 195b6-c3 (アガトンの演説)】

*ἐγὼ δὲ Φαίδρω πολλά ἄλλα ὁμολογῶν τοῦτο οὐχ ὁμολογῶ, ὡς Ἔρωσ Κρόνου καὶ Ἰαπετοῦ ἀρχαιότερός ἐστιν, ἀλλὰ φημι νεώτατον αὐτὸν εἶναι θεῶν καὶ ἀεὶ νέον, τὰ δὲ παλαιὰ πράγματα περὶ θεοῦς, ἃ Ἡσίοδος καὶ Παρμενίδης λέγουσιν, Ἀνάγκη καὶ οὐκ Ἔρωτι γεγενῆσθαι, εἰ ἐκεῖνοι ἀληθῆ ἔλεγον.*

ところがぼくは、他の多くの点ではパイドロスに同意するが、エロースがクロノスやイアペトスよりも古いという、この点に関しては同意しない。ぼくの主張では、エロースは神々のうちで最も若く、常に若いのであり、ヘシオドスやパルメニデスが語っているような、神々に関する昔の出来事は、もし彼らの語るところが真実であったとするなら、「必然 (アナンケー)」によって生じたのであって、エロースによってではないのだから。

アガトンもヒッピアスの『名言集』を熟知しており、それを基にした応酬が交わされていると考えるのが自然であろう。彼らが共通の典拠においてくり広げる知的なやりとりは、178b-cのパイドロス引用では、写本の読みを維持することで、生き生きと読み取ることができる。

## 付論：『饗宴』の語り／書き物

以上、パイドロス演説の開始部にある先人の名言の引用を分析してきたが、この問題はより広く、『饗宴』という作品における語りの重層性の問題につながる。その複雑な構造は、これまで分析してきた議論に先立つ、パイドロス演説の導入部から明らかである。

\*32 ヒッピアス『名言集』そのものはまったく残っていないが、引用が適宜加えられ、受け継がれていったものと推定される。そこからストバイオスらの抜粋集の伝統が作られたが、哲学においては、テオフラストス『自然学説の摘要』以来の「学説誌」に発展した。

## 【プラトン『饗宴』 195a6-b1】

- a6 Πρῶτον μὲν γάρ, ὡσπερ λέγω, ἔφη Φαῖδρον ἀρξάμενον  
 ἐνθένδε ποθὲν λέγειν, ὅτι μέγας θεὸς εἶη ὁ Ἔρως καὶ  
 θαυμαστός ἐν ἀνθρώποις τε καὶ θεοῖς, πολλαχῆ μὲν καὶ ἄλλη,  
 οὐχ ἥκιστα δὲ κατὰ τὴν γένεσιν. τὸ γὰρ ἐν τοῖς  
 b1 πρεσβύτατον εἶναι τὸν θεὸν τίμιον, ἢ δ' ὅς, τεκμήριον δὲ τούτου·

最初に、私〔アポドロス〕が言っているように、パイドロスがどこかこのような所から始めて語った、と〔アリストデモスが〕言った。曰く、エロースは偉大な神であり、人間たちにおいても神々においても驚くべき者である。多くの点でもそうなのだが、とりわけ生まれについて少なからずそうなのである、と。

「というのは、この神がもっとも年長であることが、尊重されている理由であり、このことの証拠なのです」と彼〔パイドロス〕は言った。

この演説は、対話の外枠で昔の饗宴の様態を尋ねられたソクラテスの友人アポドロスが、その宴会に出席したアリストデモスが記憶して伝えてくれた言説を憶えていて語っているものである。それゆえ、文章は全体としてはアポドロスの一人称の語りであるが、その中にアリストデモスの語りがあり、また、演説内では各話者が一人称で語っている。最初の論者であったパイドロスの語りは、そのような間接話法から直接話法への移行部にあたる。

中世写本や近代初期の校訂版では、引用にあたって明示的な表記は必ずしもなされていなかったが（欄外に記号が付されることはあった<sup>\*33</sup>）、その後、現代校訂版にいたるテキスト表記では、引用符や改行などの工夫がこらされてきた。実際に口頭で語られた場合には、抑揚や間などで引用部がはっきりと分かったことであろうが、書かれた文字テキストではその区別が消えてしまう。

パイドロスがヒippiasを引用することでヘシオドスやパルメニデスを引用する重層構造は、ソフィストの言論活動とも関わる、プラトンによる「書き言葉」への問題提起、あるいは、挑戦であったとも考えられる。

<sup>\*33</sup> BW 両写本には、ヘシオドス引用部の欄外に > 印がある。パルメニデス引用部にはない。T 写本は手元の画像が不鮮明で確認できなかった。

## 参考文献

- Friedrich Ast (1821), *Platonis Opera quae extant*, III, Weidmann, Leipzig.
- Carolus Badham (1866), *Platonis Convivium*, Apud William et Norgate, London, Fr. Frommann, Jena.
- Johann Georg Baiter, Johann Kaspar von Orelli, & August Wilhelm Winckelmann (1841), *Platonis Opera Omnia*, XVII, *Platonis Symposium*, Meyeri & Zelleri, Zürich.
- Immanuel Bekker (1817), *Platonis Dialogi*, II.2, Berlin.
- Luc Brisson (1998), *Platon, Le Banquet*, presentation et traduction inédite, GF Flammarion, Paris.
- John Burnet (1901<sup>1</sup>, 1910<sup>2</sup>), *Platonis Opera*, II, recognovit brevique adnotatione critica instruxit, Oxford Classical Texts, Clarendon Press, Oxford.
- Robert Gregg Bury (1909<sup>1</sup>, 1932<sup>2</sup>), *The Symposium of Plato*, edited with introduction, critical notes, and commentary, W. Heffer, Cambridge.
- Émile Chambry (1958), *Platon, Œuvres complètes*, III, Classique Garnier, Paris.
- Carl Joachim Classen (1965), “Bemerkungen zu zwei griechischen ‘Philosophier-historikern’”, *Philologus* 109, 175–178.
- Kenneth Dover (1980), *Plato, Symposium*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Giovanni Remo Francesco Ferrari (1987), *Listening to the Cicadas: A Study of Plato’s Phaedrus*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Carl Friedrich Hermann (1851), *Platonis Dialogi secundum Thrasylli tetralogias dispositi*, II, Teubner, Leipzig.
- Christian Gottlob Heyne (1781), *Abhandlung und Auszüge der königlichen Akademie der Inschriften und der schönen Wissenschaften zu Paris: in Klassen gebracht/ 1. Das griechische Alterthum*, Weidmanns Erben.
- Alexander Hommel (1834), *Platonis Convivium*, recensuit, emendavit et illustravit, Leipzig.
- Arnold Hug (1884), *Platons Symposion*, 2 Aufl., Teubner, Leipzig.
- Otto Jahn (1864), *Platonis Symposium in usum scholarum*, Apud A. Marcum, Bonn.
- Walter von Kienle (1961), *Die Berichte über die Sukzessionen der Philosophen in der hellenistischen und spätantiken Literatur*, Freie Universität, Berlin.
- Walter Rangeley Maitland Lamb (1925), *Plato III, Symposium*, Loeb Classical Library, Harvard University Press, Cambridge Mass.

- Jaap Mansfeld ([1983]/1990), “*Cratylus* 402a–c: Plato or Hippias?”, L. Rossetti ed., *Atti del Symposium Heracliteum 1981*, I, Edi. del Ateneo, Roma, 43–55; repr. in his *Studies in the Historiography of Greek Philosophy*, Assen / Maastricht, 84–96.
- Jaap Mansfeld ([1986]/1990), “Aristotle, Plato, and the Preplatonic Doxography and Chronography”, G. Cambiano ed., *Storiografia e dossografia nella filosofia antica*, Torino, 1986, 1–59; repr. in his *Studies in the Historiography of Greek Philosophy*, Assen / Maastricht, 22–83.
- Andreas Patzer (1986), *Der Sophist Hippias als Philosophiehistoriker*. Alber, Freiburg / München.
- Georg Ferdinand Rettig (1875), *Platonis Symposium in usum studiosae iuventutis et scholarum*, Libraria Orphantotrophei, Halis.
- Léon Robin (1929<sup>1</sup>, 1958<sup>6</sup>), *Platon, Œuvres complètes*, IV.2, *Le Banquet*, texte établi et traduit, Société d’édition “Les Belles Lettres”, Paris.
- Christopher J. Rowe (1998), *Plato: Symposium*, edited with an introduction, translation and commentary, Aris & Phillips, Warminster.
- Martin Schanz (1882), *Platonis Opera quae feruntur omnia*, 5, *Symposium, Phaedrus*, ad codices denuo collatos, Leipzig.
- Bruno Snell (1944), “Die Nachrichten über die Lehren des Thales und die Anfänge der griechischen Philosophie- und Literaturgeschichte”, *Philologus* 96, 170–182.
- Gottfried Stallbaum (1836), *Platonis Opera Omnia*, I.3, Gothae et Erfordiae.
- Sebastiano Timpanaro (2005), *The Genesis of Lachmann’s Method*, edited and translated by Glenn W. Most, University of Chicago Press, Chicago.
- Paul Vicaire (1989), *Platon, Œuvres complètes*, IV.2, *Le Banquet*, texte établi et traduit, “Les Belles Lettres”, Paris.
- Martin Litchfield West (1966), *Hesiod, Theogony*, edited with prolegomena and commentary, Clarendon Press, Oxford.
- Friedrich August Wolf (1782), *Platons Gastmahl, Ein Dialog*, Leipzig.

久保勉・阿部次郎 (1934)、プラトン『饗宴』、岩波書店。

久保勉 (1952)、プラトン『饗宴』、岩波文庫。

鈴木照雄 (1966)、「饗宴」、『世界の名著 プラトン I』、中央公論社。

鈴木照雄 (1974)、「饗宴」、『プラトン全集』5、岩波書店。

朴一功 (2007)、『プラトン 饗宴／パイドン』、西洋古典叢書、京都大学学術出版会。

丸橋裕 (1996)、「アクウシラオス」(翻訳、註)、『ソクラテス以前哲学者断片集』I、岩波書店。

森進一 (1963)、「饗宴」、『プラトン名著集』、新潮社。

山本光雄 (1952)、『プラトン 饗宴』、角川文庫。

山本光雄 (1973)、「饗宴」、『プラトン全集』3、角川書店。

(慶應義塾大学)